

## 『源氏物語』 関係古筆切三種

田中 登

平安文化華やかなりし頃につくられた源氏物語は、平安時代書写の資料が今日まで伝わっているかといえは、残念ながら答えは否で、あの有名な絵巻を別とすれば、源氏の写本などは、一本も、いやそれどころか断簡一葉すらも伝わっていない、というのが実情である。

だが、それでも時代を中世まで下げてみれば、写本はもちろんのこと、古筆切などもかなり豊富に伝存する。また、その古筆切の内容も、源氏物語の本文そのものは当然のことながら、そのほか絵巻の詞書・注釈書・梗概本・源氏集・和歌作者目録・系図・年立など、享受資料にもこと欠くことはない。

したがって、源氏研究者は、これら豊穡な中世期書写の古筆切を今後は大いに活用すべき旨、稿者はかつて述べたこと<sup>(1)</sup>があつたが、今般、当文芸資料研究所の所蔵になる源氏物語に係わる古筆切三点の調査をする機会に恵まれたので、ここにその報告を簡略ながらさせていただく次第である。

伝坊門局筆四半切（源氏物語）

藤原俊成女・坊門局筆と伝える源氏物語の切については、古筆名葉集類にはその記載がないものの、小松茂美氏の『古筆学大成』第二十三卷<sup>2</sup>や久曾神昇氏の『源氏物語断簡集成』<sup>3</sup>によれば、四半切が三種、六半切が三種、の計六種の断簡が伝存することが知られるのである。当該断簡は、『大成』が坊門局の源氏切（二）と分類したものに該当するが、実のところ、その源氏切（二）として収められている二葉の内の、第123図が、当該断簡そのものとなっている。

ここで、改めてその書誌を記せば、軸装一卷。本紙の大きさは縦二四・六センチ、横一五・三センチの一面十行詰。当該断簡に直接付された極札などはないようだが、ツレの切は筆者を坊門局とし、~~書~~いる。しかしながら、坊門局の真跡資料たる唯心房集や冷泉家本三十六人集などと比較して、同筆とはいえない。書写年代は、鎌倉中期ごろとして大過なからう。

当該切は、箒木巻の光源氏が紀伊守の屋敷を再訪したものの、空蝉が身を隠して会おうとしない場面。以下に、その本文を翻刻する。

- 1 たれてなをさてまちとりきこえんことのいとまはゆ
- 2 ければこ君かいて、まいりたるほといとけちかければかた
- 3 わらいたしなやましきもうちた、かせんとてすこしはな

- 4 れたる中将かつほねしたるわたとの、かくれにうつろひぬ
- 5 さる御こゝろしてひと、うしつめ給て御せうそこあれと
- 6 こ君もえたつねあはすよろつの所をわけいりてからうし
- 7 てたつねきたりいとあさましうつらしと思ていかにひんな
- 8 しとおほさんとなきぬはかりにていへはかくけしからぬ心はえ
- 9 つかふものかをさなきひとのかゝることいひつたふるはいみし
- 10 くいむなるものをといひおとして心ちなやましければ人に

注意すべきは、その本文の性格で、青表紙本とも、河内本とも異なるところがはなはだしい。今、大きく相違する箇所を、青表紙本系の大島本および河内本系の尾州家本、別本の陽明文庫本と比較してみると、次のようになる。

【3行目】

- 大島本    なやましければしのひてうちたゝかせなとせむに・  
 尾州家本    なやましければしのひてうちたゝかせなとせんに・  
 陽明本    なやましきも・しのひてうちたゝかせ・・んに・  
 断簡        なやましきも・・・・うちたゝかせ・・んとて

【3～4行目】

- 大島本    ほと・はなれてをとてわた殿・に中将か・・・・つほねしたる・・・・

尾州家本 人・はなれてをとてわたとのに中将といひしかつほねしたる・・・・

陽明本 ほと・はなれてをとてわた殿・に中将といひしかつほねしたる・・・・

断簡 すこしはなれたる・・・・中將か・・・・つほねしたるわたとの、

【6行目】

大島本 よろつの所・もとめありきてわたとのにわけいりて

尾州家本 よろつのとこもともめありきてわた殿・にわけいりて

陽明本 よろつの所・もとめありきてわた殿・にわけいりて

断簡 よろつの所・・・・をわけいりて

大島本・尾州家本のいずれとも相違する所が大きく、このような本文を持った断簡は、現状の伝本分類にしたがえば、別本としかいいようがないものであるが、さればといつて、別本の代表的伝本たる陽明文庫本に格別近いというわけでは必ずしもなさそうだ。要するに断簡は、かなり独自の本文を持っているとみてよからう。

源氏物語の場合、定家本が世に出たからといって、ただちに定家本一辺倒になつてしまつたわけではなく、鎌倉時代の本文流布状況は、混沌としてまだ帰する所を知らず、というのが実態であつたかと思われる。

この伝坊門局筆切のツレはいたつて少なく、『古筆学大成』に今一葉（空蟬卷のもので全文は八行）があるほかは、『国文研ニューズ』<sup>(4)</sup>に一葉（夕顔卷）と田中登『平成新修古筆資料集』第三集<sup>(5)</sup>に一葉収められている程度であるが、この『資料集』所収の切は、当該切と同じ籀木卷のもので、面白いことに、当該切の直前に位置し、両者直接に相接するものであることを付言しておこう。

伝四辻善成筆細川切（河海抄）

河海抄の著者・四辻善成を伝称筆者とする古筆切に細川切がある。これは、国宝手鑑の見ぬ世の友や藻塩草にも見えており、また新撰古筆名葉集の善成の項にも、「細川切 四半河海抄カナ交り杉原紙虫喰アリ」と出ていて、早くから愛好家の間で注目されていたものであることが知られよう。

本研究所蔵の切は軸装一卷。極札はないが、軸を収めた桐箱の蓋の表には、「細川切 四半」と墨書され、その裏には「浪華偶居東田居士題」として朱の角印が押されている。本紙の大きさは縦二七・四センチ、横一六・七センチ。一面に九行を書いているが、この細川切、本来は一面十一行詰の袋綴本と推定されるので、当該断簡は二行分ほどの裁断がなされたとおぼしい。内容は桐壺巻の部分で、全文は以下のとおり。

- 1 おとしめきすをもとめ給
- 2 所好則鑽皮出其毛羽所惡則浣垢求其癩痕家語
- 3 好生毛羽惡生疵漢府  
本行略
- 4 なおき木にまかれる枝もあり物を毛をふき、
- 5 すをいふかわりなさ高津御子述懐哥
- 6 吹毛求疵漢書文也
- 7 御さうしはきりつほ

曹司

8 あまりにうちしきるおりうち打はし源わたとの

9 こ、かしこのみちにあやしきわさをしつ、

当該断簡にかぎらず、この細川切は、新撰古筆名葉集が指摘するように、料紙に虫食いの跡が著しいのが特徴となっているが、それはさておき、右の部分を文禄五年（一五九六）書写の天理図書館本⑥と比較するに、特に本文上の異同はないようである。

さて、この細川切、伝称のごとく四辻善成の筆跡だとすれば、著者の自筆原本ということになり、その資料的価値はきわめて高いものとなるわけだが、すでに高田信敬氏も指摘するごとく、細川切には不用意な誤写と思われるものが少なくなく、その点を考慮に入れば、やはり後の転写本とすべきであろう。書写年代は室町初期あたりといったところか。それでも河海抄としては、最古写の資料ということになろう。

この細川切は『古筆学大成』第二十四卷に十七葉（この内、第19図が当該断簡）の多きを収めるほか、久曾神昇氏の『源氏物語断簡集成』に二葉、それから高窠帖⑨に一葉、池田和臣氏⑩のもとに一葉と、かなり伝存しているようであるが、内容は、池田氏所蔵の切が序の部分であるほかはすべて桐壺巻のものばかりである。

なお、付言すれば、尊経閣文庫には、卷子本に改装された形で、細川切のツレが伝存し、その内容は、序の前半部と料簡、それから桐壺巻の一部とからなっている由⑪である。

伝頭昭筆建仁寺切（源氏物語和歌作者目録）

平安末期、六条藤家の歌人・歌学者として活躍した頭昭を、新撰古筆名葉集で検してみると、「建仁寺切 六半源氏景図註」という記述が見出される。要するに、頭昭の建仁寺切と呼ばれているものには、源氏の系図と注釈の二種の内容からなっているという意味なのであろう。この注釈の方は世尊寺伊行の源氏釈のことであり、これについては、渋谷栄一・田坂憲二両氏<sup>(12)</sup>によって、研究が積み重ねられているので、それを参照されたい。

問題は系図の方である。この系図とされてきた切は、『古筆学大成』第二十四卷に五葉（この内、第60図が当該断簡）収められているほか、藤井隆・田中登『続国文学古筆入門』<sup>(13)</sup>と田中登『平成新修古筆資料集』第四集<sup>(14)</sup>に各一葉紹介されているが、この切が系図にあらずして、和歌作者目録だという根拠は、次のような点にある。

たとえば、『大成』第59図では、摂政の北の方（大宮のこと）と女二宮（落葉宮）に関する記述が並んでいるが、この二人の父親は、それぞれ故院と朱雀院であつて、このように父親が違う人物が並んで紹介されるということは、普通の系図であれば、ありえないことである。その点、和歌作者目録（源氏に関していえば、そのような作品の伝本は伝わっていないが）ならば、通常作者は、身分別に並べられるものだし（たとえば古今和歌集作者目録など）、しかも、和歌に関する作者の目録であるから、源氏系図には見られない巻別の歌数の記載などがあつても何ら不思議ではない。源氏集・物語二百番歌合・源氏物語歌合・風葉和歌集と、源氏物語中の和歌に対してみわめて関心の強かつた中世という時代にあつて、このような目録が編まれたとしても、けつして不思議なことではなからう。

さて、当該断簡であるが、軸装一卷。桐箱の蓋裏には「建仁寺切也」とし、さらに「浪華法眼塊堂鑑題」と墨書し

て、朱の角印を押す。またさらに当該切には、川勝宗久の筆者を「太秦頭昭」とする極札も添えられている。もちろんこの頭昭は単なる伝称であつて、書写年代はおおよそ鎌倉の中期といつたところであろう。

本紙の大きさは縦一五・二センチ、横一四・五センチ。一面には十行が書かれているが、ツレに徴してみると、本来は一面十一〜十二行であつたとおぼしく、当該断簡にはあるいは一行分程の裁断があるかもしれない。全文は、以下のとおり。

- 1 政大臣の二女六位すくせの女也竹河のまきに
- 2 三位中将より宰相になるもとは
- 3 蔵人の少将といひき
- 4 たけかはに四首一首迄あけまきに一首
- 5 宰相さいしやうこれみつ一首
- 6 源氏院のめのと子大貳のめとの
- 7 子なりもとは大輔ときこえしか
- 8 おとめのまきに右京大夫にて
- 9 つのかみかけたりとみゆむめかえ□
- 10 まきに宰相になる

当該断簡においても、先に指摘したことはいえる。5行目以下に記されている「宰相これみつ」は、いうまでもな



く、光源氏の乳母子・惟光のこと。また一方、4行目までの記述は、夕霧の息・宰相中将（蔵人少将）に関する記述で、これがもし系図であれば、この二人が、このような形で並んで記されるといことは、高田信敬氏も断じているように、まずあるまい。また、惟光の下に、物語中の和歌の総歌数が記されたりしているのも、普通の系図には見られないことである。

ただ、この和歌作者目録中の人物に関する記述と、源氏系図のそれとが類似していることは、何人も否定のしようのない事実である。今、ここでこの問題にまで立ち入ることはしないが、両者の影響関係については、今後も考究すべき重要な課題といえよう。

## 注

- (1) 田中登「古筆切の発生と源氏物語」(実践女子大学文芸資料研究所「年報」第二十九号、平成二十二年)。
- (2) 小松茂美「古筆学大成」第二十三卷(講談社、平成四年)。
- (3) 久曾神昇「源氏物語断簡集成」(汲古書院、平成十二年)。
- (4) 久保木秀夫「国文学研究資料館蔵古筆手鑑2点の紹介 その2」(国文研ニュース20号、平成二十二年八月)。
- (5) 田中登『平成新修古筆資料集』第三集(思文閣出版、平成十八年)。
- (6) 玉上琢弥『紫明抄・河海抄』(角川書店、昭和四十三年)。
- (7) 高田信敬『源氏物語考証稿』(武蔵野書院、平成二十二年)。
- (8) 小松茂美『古筆学大成』第二十四卷(講談社、平成五年)。

- (9) 久保田淳『高窠帖』(貴重本刊行会、平成二年)。
- (10) 池田和臣「国文学古筆切資料 源氏物語注釈書・梗概書の古筆切」(中央大学文学部「紀要」文学科第93号、平成六年)。
- (11) 注(7)に同じ。
- (12) 渋谷栄一『源氏釈』(おうふう、平成十二年)。
- 田坂憲二『源氏物語受容史論考』(風間書房、平成二十一年)。
- (13) 藤井隆・田中登『続国文学古筆切入門』(和泉書院、平成元年)。
- (14) 田中登『平成新修古筆資料集』第四集(思文閣出版、平成二十年)。
- (15) 注(7)に同じ。

付記 脱稿後、『ふくやま書道美術館所蔵品図録Ⅵ 古筆手鑑』に接した。四辻善成の細川切が一葉収められている。